

平成二十九年夏の收穫（乾）

土屋 博

(一) 東急東横店澁谷大古本市にて

一 「旅から旅」加藤咄堂著

(至誠堂、大正四年刊、定價金壹圓三拾錢、四七二頁)

古書價格千圓也。緒言より、「本書は予が旅から旅に於ける隨時隨所の感想を經とし、其の見聞したる所の口碑傳説を緯として、稍系統的に我が國民性の地的關係を見んと企てたるもの」なり、と。天狗、天女、稻荷と狐なども話題とせらる。著者加藤咄堂は一八七〇年京都生まれの佛教學者にして、雄辯學を世に廣む。

二 「増訂縮刷 青年立志訓」喜久田露水著

(岡田文祥堂、大正十二年廿二版、定價金八拾五錢、三五九頁)

古書價格五百圓也。初版は明治四十三年。目次を見るに、「學者にして實業界に成功したる安川敬一郎氏」(敬一郎は勝海舟の弟子、第五郎の父。)、「不毛の地を拓いて我が國の版圖を殖したる玉置半右衛門氏」(あはうどりの鳥島を開拓)

三 「縮刷 修養の指針」春日靖軒著

(郁文社、大正十二年刊、定價金壹圓八拾錢、六四〇頁十一〇頁)

古書價格五百圓也。自己、家族、社會、國家に對する修養として、大町桂月、三宅雪嶺、澁澤榮一、新渡戸稻造、嘉納治五郎らの教訓、數多掲載せらる。たとへば、桂月論文の掲載例を列擧せば、以下の如し。「人格の修養」、「色慾の戒」、「勤儉」、「羞恥心」、「不規律を戒む」、「義理と人情」、「人を見るの明」、「日本の帝室」。

四 「日々の慰安」加藤美侖著

(教文社、昭和二年五版、定價金參圓五拾錢、七三三頁)

古書價格千二百圓也。初版は大正十五年。序によれば、「紙上ラヂオ」とでもいふべきところが本書の狙ひどころの由。たとへば、豊太閤の東山稻荷への手紙より、「猶ほ延引せば日本國中狐狩申しつくべく候」と。著者加藤美侖はみろん大正のなんでも博士と言はれ、昭和二年三十八歳にて歿す。

五 「漢學者傳記集成」竹林貫一編

(関書院、昭和參年刊、定價金七圓五拾錢、本文一三八一頁)

古書價格千五百圓也。通常相場は一萬圓以上。

先哲叢談等に掲載せらるる二百五十九名に、漏れたる者及び最近に至るまでの百二十二名を加へ、合計三百八十一名を網羅す。これぞ正に永年待望せる書なり。藤原惺窩五頁、伊藤仁齋七頁、貝原益軒五頁、新井白石七頁、荻生徂徠七頁、賴山陽九頁、佐藤一齋二十二頁、廣瀨淡窗五頁。

六 「東郷元帥 景仰錄」海軍兵學校編

(大日本圖書、昭和十年刊、定價金七拾五錢、二六〇頁)

古書價格五百圓也。東郷平八郎元帥の一年祭に公刊せらる。

徳富蘇峰の「予が觀たる東郷元帥」なる長編の収録論文を見るに、蘇峰の質問に、元帥答へて曰く、「宗谷海峡も津輕海峡もあの時期は濃霧の甚しい處、大艦隊の航行には最も不適當」と、對馬水道を豫測。「字戦法については、「明治三十七年黃海の戦にて經驗し、今度こそはそれを徹底的にやる積りであつた」と述べた。

七「頼山陽 人と思想」安藤英男著

(白川書院、昭和五十二年第二刷、定價三千五百圓、二五三頁)

古書價格千圓也。銀行マンより國士館大學の先生に轉じたる在野の頼山陽研究家安藤英男の研究成果のエッセンス、披瀝せられ、寫眞も豊富なり。

(二) 東京古書會館にて

八「將來の日本」徳富猪一郎著

(經濟雜誌社、明治二十年四版、定價金五十錢、二二三頁)

古書價格三百圓也。初版は明治十九年。蘇峰の書籍蒐集家にとり垂涎の原書。卷末に各新聞の本書批評を含む。時事新報曰く、「議論痛快文字勇壯近來の好文字なり」と。毎日新聞曰く、「氏の年齒二十三四に過ぎずして此文章あり」と。

九「山陽詩鈔」頼襄著

(弘集堂東雲堂井浏览發兌、明治二十七年三版、一七四頁)

古書價格二百圓也。初版は明治二十六年。

冒頭の詩は、癸丑歲偶作の「十有三春秋 逝者已如水」。卷末の詩は、「乙酉除夜」。

十「大日本膨張論」徳富猪一郎著

(民友社、明治二十七年刊、定價十錢、一六六頁)

古書價格二百圓也。著者曰く、「若し過去幾百年の歴史をして收縮の歴史たらしめば、將來幾百年の歴史は膨張の歴史と云はざるを得ず。徳川時代の爲めに收縮史を編するの苦役を擔ふは現今の史家なり。維新時代の爲めに膨張史を編するは將來史家の快務たり」と。

十一「紀行文集 檜木笠」文學士久保天髓著

(博文館、明治三十四年刊、四六六頁)

古書價格五百圓也。「水戸梅の一日」の冒頭より、「赤符車に乗りて、同行の友は桂月、臨風、蝶二の三子、さして行衛は水戸なりけり」と。

十二「最新手紙の文」大畑年己著

(積善館、明治三十九年刊、一八四頁)

古書價格二百圓也。年始の文例、「改曆の御吉慶日出度申納候貴家皆々様愈御超歳遊ばされ奉賀候」。

十三 「美文韻文黄菊白菊」文學士大町桂月著

（博文館、明治三十九年刊、定價金貳拾五錢、三九八頁）

古書價格三百圓也。初版は明治三十一年。序より、「この三四年の間、余がものした美文韻文は、花紅葉と黄菊白菊とに盡く」と。

十四 「叙情美文」三田村楓蔭選

（石塚書舗、明治三十九年刊、二五〇頁）

古書價格五百圓也。廣瀨武夫「陣中の雁信」より、「臨戦の佳例として武夫は其の時に際し出來得べきだけ身の廻りを片付たり。前日快く海水温浴を取り、又其味爽冷水を以て身を浄め、下衣シャツ等を改め、殊に香を焚き込めたり」。

（平成二十九年九月七日受附）